

香川ヒサ歌集

『The quiet light on my journey』

(ながらみ書房)

『ヤマト・アライバル』に続く香川ヒサの第九歌集。二〇一五年から二〇二三年までの作品がまとめられている。

私たちの生きる現代文明をまなざしながら、ときにクルルに、ときにユーモラスに人類の愚かさや滑稽さを詠む。本歌集では疫病や戦争などの世界情勢の荒波を背景に、社会詠の切れ味にさらに磨きがかかっている。

人間の作つたものが壊れてる現場に車、ビル、民主主義

義

抽象的な歌だが、下の句の畳み掛ける語の羅列、結句の「民主主義」に鬼気迫る説得力があり、安穩と生きる我々のぼおとした目が開かれていく。

卒業後五十年経し顔の我これより我と記憶されなむ  
喜んで伺ひますと返信す感情は約束できないものを  
かなしき真実と言うべきか、これぞ人生と言うべきか、

人間の隠しようのない影の部分が淡々と照らし出される。  
きれいな手触れてはいけない汚い手触れてはいけない

きれいな手

疫病に留まらず、清浄・不浄、それを巡る人間関係の諸問題を広く包みこむ普遍性を持つ歌である。本歌集は現代日本の生ぬるさに一滴の刺激を与えてくれるだろう。

軟水で淹れた紅茶にサンキスト・レモン一切れ酸っぱい戦後  
(岩館澄江)

フアブリ歌集

『リモーネ、リモーネ』

(喜怒哀楽書房)

甘酸っぱくて丸っこく人懐っこい手のひら大の柑橘類の果実のような歌の数々。

リモーネはレモンレモンはリモーネで今日はすっぱいものが食べたい  
サルディーニヤ島出身・イタリア語を母語とする作者が「子どもが使うような表現さえ知っていれば、面白い短歌が詠める。」と日本語で歌う一四五首とエッセイ。二〇一七年から二〇二三年の間の、日本の平和な日常をいとおしみ、ときに柔らかなお菓子にくるむようにして批評性を差し出してくることもある。

撮る前に差してしまつた喫茶店のケーキは使い物にならない  
これからは紙ストローにくちづけてゆくあたたかな冬のほうじ茶  
牛乳がアクリル板に飛び散つたカフェはいつもより賑やかだった

風景、食文化、他者との関係性を大切に味わい、言葉にしてゆく。世界のかわいくて少しかなしい部分と、作者のチャーミングな視点。日々は少しずつ変質しながらはこばれてゆく。イタリア語、日本語、そして定型詩という幾重かの表現形式に濾過されることで、純度の高い「愛(かな)し」のところが滴ってくる。

(白川ユウコ)